「頭が良くなる経済学思考の技術」

著者：木暮　太一
出版社：中経出版
発行：2010 年 4 月 16 日
価格：1,500 円



「人間の生活に必要な財貨･サービスを生産･分配･消費する活動。」これは、財政、企業、家計の関わり合いにおいて日々繰り広げられている「お金」に関する活動であり、「経済活動」のことである。では、「経済学」とはどのような学問であろうか。

本書では、「経済学」とは、「お金」の学問ではなく、「経済活動の原理原則を活用して、物事の最適化や均衡点を求めるツールである」と述べられている。そして、そのツールに基づく思考法を「経済学思考」と呼び、これを活用すると未来を高い精度で予測できると言い切っている。それは、経済活動における需要と供給の関係の原理原則を応用し、三つのキーワードによって分析し、あらゆる物事の未来予測に活用するというものである。そのキーワードの一つ目が「インセンティブ」、二つ目が「ルール」、三つ目が「均衡点」である。市場における価格形成時に、売り手は出来るだけ高くたくさん売りたい。買い手は出来るだけ安くたくさん買いたい、という「インセンティブ」を持つ。しかし、現実の景気の状態などの外部要因や品質などの内部要因の制約である「ルール」に従って、妥当な価格、販売量である「均衡点」に落ち着く。これだけなら、需要と供給による価格形成の話なのであるが、本書はこの思考を様々な場面で応用し、未来予測に役立てている。「インセンティブ」と「ルール」のどちらとも変わらない場合は未来も変わらない。どちらかが変われば未来が変わる。つまり「インセンティブ」と「ルール」の変化を見極めるフレームワークを持つことが重要であるという考え方である。

例えば、事例として「人々のインセンティブを無視していた定額給付金」「秘書だけが逮捕される汚職事件のメカニズム」「インターネットの出現でタウンページがすべきこと」「年金が破綻する経済学的な理由」「食糧危機で日本がすべきこと」など、三つのキーワードを使ったフレームワークによってシンプル且つ論理的に予測を行っている。

複雑を極める現在社会において、このシンプルなツールによって、あらゆる物事の未来予測を行うには、ツールを使いこなすためのかなりのトレーニングが必要であろう。しかしながら、経済学を未来予測のためのツールととらえ、人々や社会の「インセンティブ」と「ルール」のあるべき姿を提案するための学問であると定義している本書は、これから経済学を学ぼうとする多くの高校生に読んで欲しい一冊である。

京都府立京都すばる高等学校
企画科学科長 貴島良介